

# 光州で石川啄木を語る

内田 弘

## (1) 東アジアに漂う沈痛なもの

今回の韓国訪問は1993年以来16年ぶりである。到着2日目(2009年3月15日)、ソウルの南方にある「独立記念館」を訪れた。そこに日本帝国主義の韓国支配の具体的なありさまが再現されている。1919年3月1日からの「三・一独立運動」の苛烈さ、拷問の様子、1945年8月15日の光復の喜びを展示した最後の展示室 — 今でも、鮮明な印象が残る。「独立記念館」の全館に沁みわたる沈痛なものは、かつて訪れた広島平和公園にも漂っていた。今回の韓国訪問から1ヵ月後の4月下旬に、南京を訪問した。最初の南京訪問は1971年盛夏である。38年ぶりである。1937年12月の日本軍の南京虐殺を記録する「南京大虐殺記念館(侵華日軍南京大屠殺遇难同胞記念館)」も沈痛なもので満たされていた。会場の内部は光を落とし重い鐘の音がゴォーン、ゴォーンと繰り返し鳴り響いている。南京繁華街の中心部で映画「南京!南京!」を観た。映画は、南京「中華門」攻防の日中両軍の戦闘場面から始まり、中国人捕虜を解放する良心的な日本軍人の自決で終わる。そこに中国の日本に対する基本姿勢が表現されている。

韓国訪問3日目には光州を訪れ「光州事件」のことを勉強した。ここでも「独立記念館」や「南京大虐殺記念館」と同じ沈痛なものが身にしみてきた。この事件の犠牲者を弔う墓地で犠牲者の霊に向かって焼香した。光州訪問の締めくくりは、関係者との懇親会であった。筆者の前に席を移してきて親しく語りかけてくれた韓国の方に、日韓両国の間の壁を少しでも低くしたいとの思いから、石川啄木の日韓併合条約(1910年=明治43年8月22日)を批判する歌、

地図の上朝鮮国にくろぐろと墨ぬりつ、秋風を聴く

を紹介し、その意味を説明した。この歌は条約締結直後の1910年の9月に書いた「九月の夜の不平」と題する34首の歌の30番目の歌である。まず雑誌『創作』に1910年10月号に公表された。「九月の夜の不平」34首のうち26首は『一握の砂』に収録される。しかし、この歌を含めて8首はそこに収められていない。いずれも、「治安警察法」(豊島・花井・谷田275-279; 荻野富士夫58ff参照)のもとで官憲の検閲にかかる恐れのある歌である。収められなかった歌に第20首、

何となく顔がさもしき邦人の首府の大空を秋の風吹く

がある。日露戦争(1904-1905年)で戦勝し「日本は世界の一等国である」と空威張りする日本人の「顔がさもしい」と啄木はいう。東京の大空に西の韓国から風が吹いてくる。その秋風の

下に生きる日本人を評しているのである。啄木は別の個所(時論)でも日本人が戦勝に興奮して自惚れる姿を批判している。日清戦争(1894-95年)は朝鮮半島の支配権をめぐる明治日本の清国との戦争である。その10年後に英米に戦費を借りて韓国や満洲の支配権をめぐる戦う。帝政ロシアとの日露戦争である。それに辛くも勝って、一気に進めたのが日韓併合である。こんな意味のことを、その人と、マッコリを飲み交わしながら、語った。その人は、石川啄木のことは知らなかったといい、そのような日本人がいたことに感激する、とって顔を輝かした。

## (2) 啄木は秋瑾を如何にして知ったか

筆者は、韓国訪問の9ヶ月前(2008年6月)に「啄木の秋風、秋瑾の秋風」と題する啄木研究論文を出した(内田 2008)。そこで啄木の眼差しは韓国より前に中国に向けられていたことを明らかにした。啄木は、まず清朝末期の中国に注目し(1907-08年)、そのあと韓国に関心が向かう(1909-10年)という順序で、東アジアへの関心をひろげる。人物で象徴させれば、「秋瑾(Qiu-jin 1875-1907)から安重根(An Chung-gun 1879-1910)へ」という順序である。或る啄木研究の第一人者はその秋瑾に注目した拙稿を読んで、もう一点、明示することができれば、筆者の主張は完全に実証されると評した。即ち、啄木が秋瑾の詩詞「寶刀歌」を読み、そのいわば相聞歌として「詩(無題)」(『小樽日報』1907年10月15日公表)を書いたという筆者の主張は、秋瑾の詩詞「寶刀歌」がその「詩(無題)」の公表以前に日本に伝わっていた事実を明示する必要がある、という。ありがたい批評である。

ここでは、秋瑾のその詩詞が日本に伝えられた一つの可能性を指摘する。永田圭介(永田 169-172)によれば、1874年(明治7年)生まれ東京帝国大学を卒業した鈴木信太郎は、北京滞在中、1903年4月に秋瑾に日本語と英語を教えた。秋瑾は、鈴木が所持している日本刀に魅せられ、鈴木から一振りの日本刀を贈られた。秋瑾は謝礼に詩詞《日本鈴木文学士寶刀歌》(秋瑾 2004 : 106 参照)を捧げた。鈴木は1906年(明治39年)に帰国した。次の年1907年(明治40年)7月に秋瑾は紹興で決起し斬首される。秋瑾と師弟関係にある鈴木は秋瑾の決起=斬首に驚きその詩詞と共に別の詩詞「寶刀歌」[1904年作(秋瑾 2004 : 55-56 参照)]を新聞記者などジャーナリストに教えた可能性がある。本稿の以下に続く「(3) 啄木の歌集「石破集」に潜む秋瑾」と「(4) 旋回する啄木(1907-1910年)」も、啄木が秋瑾を知っていた蓋然性を示すであろう。

## (3) 啄木の歌集「石破集」に潜む秋瑾

ここでは、啄木歌を20世紀初頭のアジアで考えてみたい。啄木の「詩(無題)」以後の短歌を

読んでみると、啄木は秋瑾を忘却せず詠っている、と思われる歌の数々に出会う。日韓併合よりほぼ2年前、啄木が『明星』申歳第10号(最終号、1908年=明治41年11月8日刊行)に掲載した「謎」と題する歌集に、つぎの歌がある。

陰山<sup>いんざん</sup>の玉にみがきし剣<sup>みが</sup>よりもするどき舌は何に研ける

陰山<sup>インシャン</sup>は、現在は中国の内モンゴル自治区の東西400km、標高1500~2000mの山脈のことである。陰山の「玉」は秋瑾の「瑾」に通じる。歌に「剣」とある。秋瑾は詩詞「剣歌」・「寶劍歌」・「寶刀歌」・「紅毛刀歌」・「日本鈴木文学士寶刀歌」を書いた(秋瑾2004参照)。秋瑾は脇差に「寶刀」を差していた。啄木は、秋瑾「寶刀歌」との相聞歌「詩(無題)」を公表した時(1907年10月15日)から約2ヶ月後、同年12月27日の日記に秋瑾の「寶刀歌」を念頭に「予に剣を与へよ、然らば予は勇しく戦ふ事を得べし」と記していた(石川1978b:178)。上記の歌がいう「するどき舌」とは「舌鋒鋭い」ということである。秋瑾は舌鋒鋭い演説家であった(永田279-280)。歌集の題名「謎」は秋瑾が隠されている謎という意味である。啄木は上の歌の元歌を1908年10月10日夜の「明治41年歌稿ノート 暇ナ時」(以下「歌稿ノート」と略)に記している(石川1978b:252)。啄木が同年7月10日刊行の『明星』申歳第7号に公表した「石破集」と題する全114首の中に、つぎの第35首がある。

見よ君を屠<sup>ほふ</sup>る日は来ぬヒマラヤの第一<sup>だいいっほう</sup>峯に赤き旗立つ

秋瑾は1年前の清朝末期の1907年7月13日に反清朝の軍事行動を起こし逮捕され、15日午前4時に斬首された。処刑場は紹興の城内の古軒亭口である(竹内169参照)。この歌が公表されたのは1908年7月10日である。秋瑾の命日に近い。啄木の「詩(無題)」の発表月日は秋瑾斬首3ヶ月後の10月15日である。15日は秋瑾の祥月命日である。秋瑾を斬首した刃物は「屠刀」である(永田435)。その屠殺の日ヒマラヤの第一峯=エベレストに「赤旗」が立つという。この歌は、秋瑾「寶刀歌」第19行「赤鉄主義當今日」(赤い血を流し鉄剣で武装し死を覚悟して今日の状況に当る)に重ねている(秋瑾2004:56;碇「秋瑾詩詞」)。啄木歌と「寶刀歌」とは「命がけでことに当たる」、「日=今日」、「赤旗=赤鉄主義」で共通する。秋瑾が起義を決意し、啄木がその結果を称えるという応答関係である。屠殺された者の死は歴史的転機となる。啄木は秋瑾斬首の1年後でも、秋瑾を強く記憶している。「石破集」第71首が目される。

『工人<sup>こうじん</sup>よ何をつくるや』『重くして持つべからざる鉄槌<sup>てっつい</sup>を鍛<sup>う</sup>つ』

「工人」=労働者は「持つことを禁じられている鉄槌」=武器を作っている。この歌は、秋瑾「寶刀歌」第41行・第42行の「鐵聚六州」(鉄は全国から集め)・「鑄造出千柄萬柄刀兮」(千本万本の刀を鑄造する)に重ねている(秋瑾2004:56;碇「秋瑾詩詞」)。歌集「謎」第30首「千万<sup>み</sup>の蝶わが右手<sup>み</sup>にあつまりぬ且つ君も来ぬ若き日の夢」の「千万」も「寶刀歌」の上記第42行に重ね、「右手に集まる蝶」は「寶刀歌」第29行「我欲隻手援祖國」〔自力で(右手に

宝刀を握り)祖国を救いたい]に重ねている(秋瑾 2004 : 56 ; 碓「秋瑾詩詞」)。「隻手」=片手には「自力で」の意味がある。その後、(右手に宝刀を握り)と挿入したのは、秋瑾「劍歌」第10行に「右手把劍左把酒(右手に劍を握り左手に酒盃を持つ)とあるからである(秋瑾 2004:50)。啄木が「詩(無題)」で「右手に翳すは何の劍、左手に執るのは何の筆」と書いたとき(石川 1979a : 362)、「寶刀歌」第29行だけでなく「劍歌」第10行にも重ねている。上記啄木歌では「宝刀」が「蝶」に変わる。「石破集」第4首はこうである。

### 我つねに思ふ世界の開發の第一日のあけぼのの空

秋瑾は旧体制を破壊し新世界を開発する。この歌は、秋瑾「寶刀歌」第6行・第7行「發祥根據在崑崙(祖先の發祥の地は崑崙であり)・「關地黃河及長江(黄河と長江にまたがる大地を開発し)を重ねている(秋瑾 2004:55-56 ; 碓「秋瑾詩詞」)。秋瑾は原初復帰をめざし前進する。秋瑾が生きた清朝末期から伝統的婚姻法を廃絶する動きが高まり、秋瑾の死後、江西中華ソヴィエト共和国が成立した1931年の翌年、そこでは新しい婚姻法が制定された。生産労働・衣食住・児童生育・疾病・衛生などの民衆の生活問題の解決の主要な一環として制定された。それまでは金がなければ妻を迎えられなかった。だから老年婚や童養媳(少女を奴隷として買い取り将来家男の妻とする慣習)があった。1936年ごろ、陝北ソヴィエト区では纏足・溺嬰(嬰兒殺し)・乞食・失業が禁止された。中華人民共和国成立(1949年)とともに、纏足・溺嬰(嬰兒殺し)・売買婚・童養媳が法的に禁止された(仁井田 1974① : 106-108)。清朝末期の秋瑾が望んだことは、女の足も、男の足と同じように、のびのびと育つ世界である。それを許容しないのが旧習である。「石破集」には「靴」・「沓」・「足」を詠う歌が多い。それらは秋瑾の纏足を象徴する表現である。秋瑾は1906年12月17日上海で『天足会(不纏足を推進する会)』に参加しその会を継承し主導する。「纏足は秋瑾にとって仇敵である」(永田 323)。つぎの「石破集」第6首は秋瑾のその決意が詠われている。

### 靴のあとみなことごとく大空をうつすと勇み泥濘<sup>ぬかるみ</sup>を行く

最初の「靴」とは、纏足を強制された秋瑾が履いている「小さな沓」である。秋瑾は、自分が歩み「ぬかるみ」にできる穴に水が溜まり、そこに晴れ晴れとした「大空が映るだろう」と自分を励まし「勇んで」突進していった。秋瑾は突進して処刑された。惨死した秋瑾は啄木に座視せずに立て、という。つぎの「石破集」第75首がそれである。

### 誰<sup>た</sup>そ雲の上より高く名をよびてわが酣睡<sup>かんすい</sup>を破らむとする

この歌の「酣睡」は、秋瑾「寶刀歌」第3行の「一睡沈沈数百年」(深い眠りについてもう数百年経った、さあ、惰眠から覚めよ)に重ねている(秋瑾 2004 : 55 ; 碓「秋瑾詩詞」)。「新詩社詠歌其四」の第33首「山々を常世の深き眠りより覚まさむとして洪鐘を鑄る」、第34首「あな懶う倦みぬうとまし百とせも眠りてしかるのちに覚めなむ」もそうである。

『小樽日報』第1号(1907年10月15日)に「詩(無題)」で秋瑾「寶刀歌」との相聞歌を詠った啄木は、同号に評論「初めて見たる小樽」で「我が作れる狭き獄室に惰眠を貪る徒輩は、云々」と書いた(石川 1979a : 359)。そのとき、秋瑾「寶刀歌」の上記第3行「一睡沈沈数百年」に重ねている。上記第33首の「洪鐘」(大きな鐘)の「洪」は、秋瑾が加盟した「三合会」が属する反清革命結社「洪門」(永田 218)の意味を含む。上記第75首も、啄木の怠惰な態度を批判し決起を促してやまない。啄木は『明星』申歳第9号(1908年10月10日)に歌集「虚白集」を載せる。そこに、

秋風は寝つつか聞かむ青に透<sup>す</sup>くかなしみの珠<sup>たま</sup>を枕にはして  
という歌がある。この歌の元歌は「歌稿ノート」にある(同 : 250)。この歌に注目すべき言葉がある。「秋風」と「珠」である。「珠」は「瑾」とも書く。秋瑾の「瑾」である。「秋風」は、秋瑾の斬首の際の辞世歌《秋風秋雨愁殺人(秋風、秋雨は人を深く悲しませる)》を念頭においている。頭を枕におき秋瑾の苛烈な死を思えば、青く透き通る悲しみが美しい珠のように浮かぶ、そのとき屋外に密やかに鳴り響く秋風の音を聞こう、と詠う。「石破集」第1首はこうである。

石ひとつ落ちぬる時におもしろし万山<sup>ばんざん</sup>を撼<sup>ゆ</sup>る谷のとどろき

「落下する石」とは、ただの「石」ではない。斬首され紅い血しぶきをあげて地面に落下する秋瑾の首である。「落下する一つの石は万山を震撼させ谷が轟く」とは、「秋瑾が決起して斬首された事件は、清朝末期の中国全国を揺さぶり覚醒させる」という意味である。これに対応する歌が第73首である。

我怖る昨日枯れたる大木の根に見出でたる一寸の穴

秋瑾は『中国女報』「創刊の詞」に「わずかなことの始まりが、終わりには最後には巨大になる」と書いた(秋瑾 1971 : 319)。「枯れた大木」とは、内部腐敗し崩壊寸前の大国＝「清朝末期」を指す。そこに「一寸の穴」、その崩壊の第一手を下す人間がいるとの意味である。秋瑾はその第一手であろうとして決起した。第29首はこうある。

空半ば雲にそそれる大山<sup>たいざん</sup>を碎<sup>われおの</sup>かむとして我斧<sup>われおの</sup>を研ぐ

これは、「一石落下、万山震撼」を詠う第1首を受けて、秋瑾のあとを追って、自分も不動に見える「大山」＝現状を打破するために、「斧」＝武器を準備しよう、という歌である。この歌も上記「寶刀歌」第41行・第42行を想定している。「石破集」第2首が面白い。

つと来たりつと去る誰<sup>た</sup>そと問<sup>ま</sup>ふ間<sup>ま</sup>なし黒<sup>くろ</sup>き衣<sup>い</sup>着<sup>き</sup>る覆<sup>ふく</sup>面<sup>めん</sup>の人

秋瑾は日本留学のために二度(1904年と1905年)来日している。二度目の来日＝帰国のあと、紹興で軍事反乱を起こし、即座に逮捕され、斬首される。「問う間もない」迅速さである。秋瑾は周囲の者が止めるのも聞かずに、死に急ぐように反乱を企て、逮捕され、「秋風、秋雨は人を愁いに陥れる」と詠って、屠殺される。上記の歌の「黒衣」は無政府主義の象徴である。啄木

にとって黒は「死の色」である(石川 1978b: 249)。黒衣を纏い覆面をする秋瑾は啄木にとって、殉死する無政府主義者である。無政府主義の元祖クロポトキン(Pyotr Alekseevich Kropotkin 1842-1921)の『麵麩の略取』は最初に 1892 年にフランス語で出版され、最初の日本語訳は幸徳秋水や大杉栄が『日本平民新聞』に「明治 41 年(1908 年)の 1 月から 8 月にかけて」訳した(クロポトキン 1972: 313、塩田庄兵衛「解説」)。その訳は英訳からの重訳である。啄木は『麵麩の略取』が連載されている期間の 1908 年 6 月 9 日(赤旗事件の 13 日前)の日記に平民書房に宿泊している旧友・阿部和喜衛が訪問したことを記し、7 月 19 日の日記に阿部から「日本に来てゐる支那の革命家の話をきく」(石川 1978a:281,305)と記す。啄木は阿部から『麵麩の略取』を知り、秋瑾や「赤旗事件」(同年 6 月 22 日)の菅野須賀子のことを聞いたろう。「石破集」第 49 首は「麵麩」の歌である。

ひもすがら君見ず飢ゑしわが心大熱の火に黒麵麩焼く  
 餓えた者は、せめても旨くない黒い麵麩(パン)はよこせ、という。その飢えに比すべき熱き憧憬を啄木はいだく。「黒」は「石破集」の基礎語のひとつである。第 82 首の、

祭壇のまへにともせる七燭のその一燭は黒き蠟燭  
 の「黒い蠟燭」もそうである。斬首された秋瑾を弔うために、黒い蠟燭を赤く灯し祭壇に供えるのである。こうして、つぎの第 44 首が詠われる。

飢ゑし犬皆来て吠えよ此処にゐて肉をあたへぬ若き女に  
 暗いイメージである。餓えた犬よ、集まれ、吠えよ。潔く決起し斬首された若い女に吠えよ。見よ、女は進んで死して、自分の肉をお前らに食わせようとしているのだ。このイメージはフォン・トリーア監督の映画「ドッグヴィル(犬族村)」を連想させる。このイメージを引き継ぐのが第 25 首である。

血を見ずば飽くを知らざる 獣の本性をもて神を崇めむ  
 人間には餓えた犬と同じ者がいる。斬首された死体から吹き出る紅い血潮が肺病に効くと信じて、その紅血を含んだ血饅頭を大枚払って、肺病を病む子供に食わせる。民衆のその暗愚を魯迅は小説「薬」で描いた(内田 27-28)。血饅頭は肺病に効くから、誰かが斬首されることを期待する。金で他者の臓腑をむさぼる。カニバリズムである。貧者富者の暗愚を魯迅も啄木も見ている。獣の如き人間にわが身を与える者、「捨身飼虎」する者はどのような思いを抱いているか。斬首された女は死の世界を招く。それがつぎの第 37 首にある。

鳥飛ばず日は中点にとどまりて既に七日人は生まれず  
 秋瑾の惨死を鳥も翼を窄め枝に止まり悲しんでいる。太陽は真上に止まり動かない。子も生まれぬ。静寂がゆきわたる。白昼の死の空間である。続く第 38 首は暗い昼間を詠う。

砂けぶり青水毛月の一方に高く揚りて天日を呑む

青水毛月(あをみなづき)とは旧暦の6月、新暦で7月である。7月15日は秋瑾斬首の日であり、命日である。その日、秋瑾の惨死を悼んで、砂塵が上空の太陽を覆い隠し、昼なのに辺り一帯が暗い。自然も秋瑾の死を悼んでいる。

西方<sup>さいほう</sup>の山のあなたに億兆<sup>いりひ</sup>の入日埋めし墓あるを想ふ

「西方」は「佛の国」であり、日本の西の国、中国である。秋瑾だけでない。彼女の前、彼女の後に、突進した人間、突進する人間がいる。「入日」は寂滅である。「億兆」を数える者が死んでいった。歴史は生者、死者がつくる。生々滅々である。死屍累々である。それだけの墓がある。その墓の一つが秋瑾の墓である(竹内 172-174 参照)。秋瑾の大きな第一歩が旧習を突き破り、新しい歴史を開く。秋瑾に決起を促されても啄木は動かない。その心象を「石破集」第93首と第99首が「一滴の血・血の一滴」に詠う。

九十九里つづける浜の白砂<sup>しらすな</sup>に一滴<sup>いってき</sup>の血<sup>しる</sup>を印<sup>しる</sup>さむと行く

一盞<sup>さん</sup>を飲みほすごとに指<sup>さし</sup>を嘔<sup>く</sup>み血<sup>ち</sup>の一滴<sup>いってき</sup>をさかづきに注<sup>つ</sup>す

清国留学生・陳天華(1875-1905)は「滅満興漢」を訴えるため「指を嘔み血書を書き送った」(晴海 8)。上の第93首の「九十九里つづける浜」とは通常の理解では「千葉県外房の九十九里浜」を指す。「石破集」の文脈では「九十九」は別の意味を含む。秋瑾の愛読書に陳天華の檄文『警世鐘』がある。そこに「手ニ鋼刀ヲ執ルコト**九十九**、仇人ヲ殺シメクシテ方メテ手ヲ休ムム」とある(陳 7。桑原 467。ポールド体引用者)。「九十九里…」は「九十九の鋼刀…」と響きあう。「仇人」は「復仇」ともいう。日本語で「復仇」の音読は「復九」と同じく「九、九、九…」と九を復することに通じる。第93首3首前の第90首にも、

今日<sup>けふ</sup>九月九日の夜<sup>よ</sup>の九時<sup>くじ</sup>をうつ鐘<sup>かね</sup>を合図<sup>あひづり</sup>に山<sup>やま</sup>に火<sup>か</sup>を焚<sup>た</sup>く

がある。この歌の「九・九・九」も「復九」である。この歌の「鐘」は陳天華の『警世鐘』の「鐘」を暗示する。「山に火を焚く」とは、警鐘を合図に「革命行動に出る」という意味である。啄木はすでに1907年8月27日からの函館大火に、万物が狂い「革命の旗」が翻るのを幻視し、翌年元旦に「破壊だ、破壊だ、破壊の外に何がある」と書いた(石川 1978a : 157,192)。この歌は秋瑾の愛読書『警世鐘』の執筆者・陳天華を詠った歌であろう。秋瑾も1905年に「警告我同胞」を書いている(礎「秋瑾詩詞」参照)。秋瑾も「寶刀歌」第29行に「我欲隻手援祖國」(右手に宝刀を握り祖國を救いたい)とあるように「滅満興漢」の復仇に燃えた。陳天華は1905年秋に文部省が出した「清国留学生取締規則」の文面「清国人の特有性なる放縱卑劣なる意志」で恥辱を受けたと抗議して、1905年12月8日、東京の大森海岸で自殺する(島田 65)。「石破集」第91首はつぎのように詠う。

茫然として見送りぬ天上<sup>てんじやう</sup>をゆく一列<sup>いちれつ</sup>の白き裳<sup>も</sup>のかげ

この歌は、空高く流れゆく雲がなす列は、白い喪服を纏い悲しみ歩む人々の葬列に見える、と

いう。実際、死して帰国した陳天華の葬儀への参列者たちは白い制服を着て葬列し、棺を岳麓山の墓に運んだ(晴海 26)。上の啄木歌とこの事実との符合は偶然か。陳天華は踏海=自死の前に書いた「絶命書」に「東海にこの身を投げて、諸君(中国留学生)のために記念とする」と記した(島田 70)。「東海」といえば、啄木歌集『一握の砂』劈頭歌がある。

東海とうかいの小島こじまの磯いその白砂しろすなにわれ泣なきぬれて蟹かにとたはむる

東海歌は、始めは「歌稿ノート」(1908年6月24日)に書かれ(石川 1978b : 228)、ついで「石破集」第64首(1978b : 150)として公表された。「歌稿ノート」の成立状況からして、「東海」とは、「函館の大森海岸」ではなく、陳天華が自殺した「東京の大森海岸」を含意し、広くは日本を象徴する。「われ」とは、陳天華のように大義に死ぬこともできず、ただ泣くだけの啄木自身であろう。その心境は「石破集」東海歌の2首前の第62首、

もろともに死なむといふをしりぞけぬ心安ときけきひと時ほを欲ほり

でも詠われている。啄木は、さあ、大義のために一緒に死のう、という呼びかけが怖い。死なずに安堵したい。「石破集」東海歌は、革命に殉じる者への悼歌で囲まれている。「石破集」東海歌の直後の第65首もその悼歌である。

日くれがた先づきらめける星一つ見てかく遠く来しを驚く

この「星」とは陳天華の字、陳星台の「星」であろう。「石破集」東海歌の4首前の第60首「ただ一目見えて去りたる彗星のあとを追ふとて君が足踏む」の「彗星」や第89首「大空の一片をとり試みに透かせどなかに星を見出でず」の「星」も同じであろう。「彗星」=陳を追いかけ啄木が踏んだ「足」は、陳の遺言執行者・秋瑾の「纏足」ではないか。

秋瑾たち留学生たちは陳天華の踏海=自死の翌日、1905年12月9日に追悼集会を開く。場所は約2年半後の「赤旗事件」(1908年6月22日)の現場となる東京神田「錦輝館」である。その集会の主席に選ばれた秋瑾は、留学生全員は即刻に抗議帰国しよう、と訴えた。賛同をしぶる留学生たちに向い、秋瑾は「もし帰国して満洲人に投降し、友を売って栄達を求め、漢人を厭えるものがあれば、わたしの一刀をくわらせませすぞ」といい、短刀を演壇につき立てた(竹内 145)。秋瑾は留学生を引き連れて抗議帰国する(1905年12月17日)。「赤心館」に住む啄木は、「平民書房」に宿泊する阿部和喜衛から、「錦輝館」で起きた、極く最近の赤旗事件及び3年前の清国留学生抗議事件を聞いたであろう。その衝撃が短歌革命「歌稿ノート」を生み、その磁場で東海歌が誕生する。その短歌革命の命脈は1907年の秋瑾斬首に淵源する。「歌稿ノート」・「石破集」・『一握の砂』の東海歌は一貫してそのような歴史現実の磁気を含むが、東海歌が置かれた位置がその歴史現実から離れば、その磁気が弱まる。『一握の砂』東海歌は当初の歴史現実の磁気が最も弱まった文脈にある。東海歌は『一握の砂』だけで読むと、そこにも啄木が含まれた歴史現実の意味が分からない。



#### (4) 旋回する啄木(1907—1910年)

〔短歌革命としての「石破集」〕 拙稿「啄木の秋風、秋瑾の秋風」(内田 2008)で、啄木の短歌は逆説的な存在であることを論じた。啄木が、生活が第一であり、《雅なるもの》に至上の価値をいだき作歌することをやめ、生活を規定する経済・社会・政治に関心を向けるようになったとき、短歌を詠うことは《どうでもいいこと》になった。まさにそのとき、『一握の砂』に集約されるような秀歌が詠えるようになった。啄木の固有歌はそのような逆説的存在性格をもつ。啄木の残した事実がそう語っている。そのような固有性をもつ啄木歌は、作歌をなにか《至上的なこと》と思うひとにとっては、穏やかならない存在である。啄木の「短歌革命」ともいうべき出来事は、1907年から1908年の期間に起きた。即ち、

1907年07月15日 秋瑾斬首(日本への第1報は『大阪朝日新聞』など7月20日)

1907年10月15日 「詩(無題)」・評論「初めて見たる小樽」(『小樽日報』)

1908年06月22日 赤旗事件

1908年06月23日以後「歌稿ノート」

1908年07月10日 「石破集」(『明星』申歳第7号)

1908年08月10日 「新詩社詠草 其四」(『明星』申歳第8号)

1908年10月10日 「虚白集」(『明星』申歳第9号)

1908年11月08日 「謎」(『明星』申歳第10号[終刊号])

啄木の「詩(無題)」は秋瑾の詩詞「寶刀歌」と切り結ぶ問答歌である。その応答関係については拙稿「啄木の秋風、秋瑾の秋風」(内田 2008)で示した。秋瑾斬首(1907年7月15日)の11ヶ月以後(1908年6月下旬、特に6月23日から同月27日まで)から、啄木は秋瑾を短歌で詠いはじめる。「歌稿ノート」とそれをもとにした「石破集」以後の啄木歌には、《雅なるもの》の対極にある、苛烈な現実とそれに対抗する秋瑾の象徴表現があり、秋瑾の斬首死を追悼する、沈痛な思いに浸す悲歌がある。《雅なるもの》から離脱して、歴史現実に下降しそれを直視するように変化したこと、これが啄木歌を旋回させる軸である。「詩(無題)」を公表した1907年10月15日以前の啄木歌と、1908年の「歌稿ノート」・「石破集」とを対比してみよ。①1907年10月15日以前の、啄木自身の固有性を示すこと乏しく明星派に身を寄せる作風に対して、②「歌稿ノート」・「石破集」は、それ以前の歌から自らを切断する作風が生成し貫徹している。「石破集」は、それまでとはちがう「異界」の表現に満ちている。①と②との間(1907年10月15日の「詩(無題)」から1908年6月下旬の「歌稿ノート」直前までの期間)は過渡期である。「詩(無題)」は啄木を触発させるもの=秋瑾事件に出会った衝撃を記す。しかし短歌に固有性をもって表現されるまでほぼ8ヶ月要した。その間の歌は「歌稿ノート」・「石破集」の固有性を獲得してい

ない。その懐妊期間を過ぎて、突如、「歌稿ノート」・「石破集」が出現する。これは「短歌革命」である。それらは『明星』の世界から離脱する啄木の固有性を獲得している。

「石破集」を公表した時期の啄木の内面に嵐が吹いていた(内田 2008 参照)。啄木の日記は《異様な》とでも形容すべき病跡学的な (pathographical) 精神生活を記録している。秋瑾屠殺 1 年後の 1908 年=明治 41 年 7 月 17 日、梅雨がまだ明けないのに「石破集」が刊行されて 1 週間後の日記に「何となく頭の中に**秋風**が吹く心地だ」と書く。秋瑾の辞世歌《秋風秋雨愁殺人》の「秋風」が啄木に吹く。死にたい、中国の革命家のことを知り、中国に行き「破天荒な事をしながら、一人胸で泣いていたい」と切望する(石川 1978a : 305)。

啄木自身は「石破集」をどのようにみていたのであろうか。啄木は、1908 年 6 月 26 日に「石破集」の原稿を与謝野鉄幹に送り、それを読んだ鉄幹と晶子の反応を 6 月 28 日の日記に「過日の歌の話。与謝野氏は驚いてゐる。晶子さんも予の心をよんでから歌を作ったと云った」と記す(石川 1978a : 289)。鉄幹・晶子は「石破集」を理解し、それに衝撃を受けたのである。「石破集」は不可解な歌集ではなかった。「石破集」が公表される 1908 年 7 月 10 日の 3 日前、同年 7 月 7 日の菅原芳子宛の書簡で「今度の明星の載せるべき小生の作には (無論全力を尽くしたのでもなく、ふとしたる心地にて作ったのに候へど)随分と露骨な、技巧をあまり用みざる心のままのよみ方をいたし候間」(石川 1979b : 225)と記す。しかも、『明星』に載る歌にても十分の八までは好まぬ歌に候」(同)と書いて、鉄幹の『明星』編集を批判する。7 月 21 日の菅原宛の書簡では「今月の明星に出した作の如きは、先月廿何日かの晩に、ふと歌を作ってみた様な気がしたので、布団の上に寝ころんでみて気紛れに百四十首許り書いたうちより出したのに候。然しながら小生は、歌を読むことは大好きに候。そは、現時の文壇に於て、最も進歩してゐるのは和歌に候へば也」(同 236)と指摘し、「明星の歌は今**第二の革命時代に達着したるもの**の如く候」(同 237。ボールド体は引用者)という。菅原宛のこの二通の手紙の間にある日、1908 年=明治 41 年 7 月 10 日の日記には「比日三時頃に『明星』が来た。巻頭には予の歌「石破集」と題して百十四首。…晶子女史の作は巧みではあるが、まるで生氣なし。…与謝野氏の直した予の歌は、皆原作より悪い。感情が虚偽になってゐる」(石川 1978a : 299-300)と記す。上記 7 月 7 日の書簡の「露骨で、技巧をあまり用みざる心のままに」詠んだという述懐は、晶子歌の評価基準、鉄幹による啄木歌訂正への批判基準となっている。『明星』経営では与謝野鉄幹・晶子に感謝しつつも、肝心の短歌に関する見解では自分が彼等を凌駕し新たな短歌革命を起こしていると自負する。短歌革命を記録する「石破集」の核心に存在するのが、秋瑾である。

啄木は鉄幹の改稿に不満である。その不満は、啄木は投稿歌ゲラを校正していないことを示唆する。鉄幹の「石破集」啄木歌の改定的一端を見よう。「石破集」に収めた 114 首の元の歌は、『石川啄木全集』第 1 巻所収の「歌稿ノート」にある。そこには「石破集」第 45 首の元歌(石

川 1978b : 225)から「石破集」の第 6 首の元歌(1978b : 237)までも載っている。「歌稿ノート」の元歌と『明星』に掲載された「石破集」の歌を比較すると、異なる部分がある。「石破集」を投稿するとき啄木自身は、①「歌稿ノート」記載の歌をそのまま送稿したのか、②それを改稿して送稿したのか、のいずれを想定するのかによって、その鉄幹の改訂内容も異なる可能性がある。今、比較可能なのは①＝「歌稿ノートのまま送稿した」という想定である。それを前提に元歌と鉄幹の改定＝『明星』掲載歌を比較する。「石破集」は「秋瑾追悼歌集」とみる筆者の観点から、「石破集」で一番重要な歌は第 35 首である。「歌稿ノート」のその元歌と第 35 首とを引用する。

(ああ)

元歌：見よ君を屠<sup>ほふ</sup>る日は来ぬヒマラヤの第一峯に赤き旗立つ (石川 1978b : 226)

掲載歌：見よ君を屠<sup>ほふ</sup>る日は来ぬヒマラヤの第一峯<sup>だいいっぽう</sup>に赤き旗立つ (石川 1978b : 149)

元歌と掲載歌は「第一峯」のルビの有無を除き同じである。上記の(ああ)は、啄木が「歌稿ノート」上の元歌で「ああ」を抹消し「見よ」に訂正したことを示す。「石破集」掲載歌第 1 首を元歌と比較しよう。元歌の(千仞の谷…)も啄木が抹消＝訂正した部分をしめす。

(千仞の谷轟々と鳴りて湧きわく谷の叫びを)

元歌：石一つ落として聞きぬおもしろし轟と山を把る谷のとどろき (1978b : 226)

掲載歌：石ひとつ落ちぬる時におもしろし万山<sup>ばんざん</sup>を撼<sup>ゆ</sup>る谷のとどろき (1978b : 148)

啄木は「石を落とす」と他動詞で表現する。落とした石で谷が轟くのを待っている。轟いたので「おもしろい」と思う。鉄幹は「石が落ちた」と自動詞に直した。鉄幹は《万山を轟かせるために石を落とすとは、危険な行為だ》と慄いたのか。轟きを聞く人間は受動的である。面白さは偶然発生した現象になる。啄木の必然的・能動的表現か、鉄幹の偶然的・受動的表現か、この観点の違いは秋瑾を念頭におく啄木にとって重要である。そのため、鉄幹が改定した歌は「感情が虚偽になってゐる」という不満が生まれたのである。

「歌稿ノート」には、「石破集」に収められなかった、つぎの歌がある。

喪服着し女はとへど物いはず火中に投げぬ血紅の薔薇 (石川 1978b : 229)

女なる君乞ふ紅き叛旗をば手づから縫ひて我に賜へよ (石川 1978b : 235)

最初の歌の「喪服」とは、1907年7月15日に斬首された秋瑾の暗喩であろう。問われても無言なのは、女が死者だからである。惨死の象徴色＝喪服の「黒」と革命の象徴色＝火・血紅・薔薇の「赤・紅」が対照しあう。第2首の「紅き叛旗」とは、「歌稿ノート」執筆(1908年6月23日夜から)直前に東京神田の「錦輝館」で起きた「赤旗事件」(1908年6月22日)の被告・菅野須賀子の象徴であろう。菅野は同年8月15日に法廷で「自分は最も無政府主義に近き思想を抱持し居れり」と明言した(『熊本評論』3)。その法廷の傍聴席に幸徳秋水がいた(同6)。その3日前の8月12日、秋水は内山愚童に赤旗事件の「弔い合戦」の必要を語る(絲屋 275)。その結

果、秋水の意図を超えて大逆事件が起こる。

啄木のクロボトキン・幸徳たちの無政府主義への本格的な関心は、1910年の大逆事件以後のことではない。2年前の1908年の赤旗事件から始まる。「歌稿ノート」・「石破集」から「謎」までの歌集に表現された、このような歴史現実が東海歌誕生の背景にある。「石破集」は一見「異界」の表現に見える。しかし、秋瑾・陳星台(陳天華)・菅野須賀子・幸徳秋水など、啄木の同時代人と結びつけて読むとき、その実像が浮かび上ってくるのである。清朝末期中国の秋瑾・陳天華の実践的課題は漢族独立＝女性解放をめざす第一次市民革命であり、明治末期日本の菅野須賀子・幸徳秋水の課題は産業革命が生んだ勤労者の労働＝生活条件改善をめざす第二次市民革命であった(内田 21-23 参照)。

〔伊藤博文と啄木〕 啄木の1909年は1908年の短歌革命を1910年の日韓併合批判歌に媒介する過渡期である。「石破集」公表の次の年、1909年＝明治42年10月27日に前韓国統監の伊藤博文が満洲ハルビン駅で、安重根に殺害される。啄木はその出来事を知り、伊藤の死去を悼む。啄木は『岩手日報』に時論「百日通信」(1909年＝明治42年10月5日から同年11月21日まで全28回)を執筆した。その第16回(執筆時10月27日)で、伊藤の死を「噫、伊藤公死せり！」と題し、「韓国革命党青年の襲ふ所となり、腹部に二発の短銃丸を受け、後半時間にして車室の一隅に眠れる也」と記し伊藤の生涯を描く。「寸時の暇もなく新日本の経営と東洋の平和の為に勇ましき鼓動を続け来りたる心臓は、今や忽然として、異城の初雪の朝、其活動を永遠に止めたり」(石川 1980 : 191)。しかも伊藤を「明治の日本の今日ある、誰か公の生涯を一貫した穏健なる進歩主義に負う所、その最も多きに居るを否むものぞ」と評価する。啄木の「穏健な進歩主義者」という伊藤評価は第17回(同年10月28日執筆)でも再論される(石川 1980 : 192)。その第17回で、伊藤の死と韓国人の心情を対比する。「(伊藤の突然の死という)其損害は意外に大なりと雖ども、吾人は韓人を愍むべきを知りて、未だ真に憎むべき所以を知らず。寛大にして情を解する公も亦、吾人と共に韓人の心事を悲しみしならん」(同上)。伊藤は非業の死に遭遇しても、寛大な気風でそれを受け入れたらう、というのである。韓国人を憎むのではなくて「愍む」という。韓国人の心事を「悲しみの心」で受け入れるという。こうして、安重根の「公憤」は啄木のいう「伊藤の寛容」で遮断されることになる。啄木は「百回通信」の第18回で5首の追悼歌を今は亡き伊藤に捧げる(石川 1980 : 193)。伊藤悼歌が『岩手日報』掲載された3日前(1909年11月4日)、啄木は『朝日新聞』に伊藤悼歌を9首載せる(石川啄木 1993 : 307-308)。そのうち次の第2首と第6首は『岩手日報』と重複している。

とぶらひの砲<sup>ついで</sup>鳴りわたり鳴りをはるそのひと時は日も照らずけり  
ゆるやかに<sup>ひつぎ</sup>枢の<sup>くるま</sup>車きしりゆくあとに立ちたる白き塵かな

〔言論統制と荷風評価〕 啄木は「百回通信」第19回で明治国家の言論統制を「文芸取締に関

する論議」で取り上げる。生田葵山への「理屈は別として同情すべき事」との態度、森鷗外への「社会現象としては随分矛盾ある出来事」との評価を示す。永井荷風への態度はかなり異なる。「日本のあらゆる自然、人事に対して何の躊躇もなく軽蔑し嘲笑する」荷風の態度に矛先が向けられてゆく。フランスはすべて良い、日本はすべてだめ、と決めてかかる荷風の基本態度を突く。啄木は「荷風氏の非愛国思想なるもの」を批判する。

啄木はその批判を第20回で書く。「田舎の小都会の放蕩息子が、一、二年東京に出て新橋柳橋の芸者にちやほやさされ、帰り来て土地の女の泥臭さを逢ふ人毎に罵倒する。その厭味たっぷりの口吻其儘に御座候」（石川 1980：195）。啄木は荷風と共に日本の道德形式に不満ではある。しかし、「(荷風のように)漫然祖国を罵りたりとて畢竟何するものぞ」(同)、日本を「真に愛する能はずんば去るべきのみ」(同)と書く。啄木は傍観批評者を許せない。「一国国民生活の改善は、実に自己自身の生活の改善に初まらずべからず。自由批評といふ言葉は好し。然れども、批評は其結論の実行を予想するに於いて初めて価値あり」(同)と指摘する。啄木は実践を予定しない理論は無意味であるという。啄木は実践の現場をまず日本に限定する。啄木は自分の実践主義が明治国家に回収される可能性があることにまだ明敏ではない。先にみた伊藤博文評価にそれが出ている。啄木は実践の起点を自己の生活改善に定める。伊藤は自分の現場で任務を誠実に遂行したと啄木は考えたのか。しかし、誠実実行の社会的帰結は不問でよいのか。その問いが啄木に短歌革命をさらに促進する。

【日韓併合・大逆事件以後の啄木】 批判の刃が自分に向かうことを自覚するのが「百回通信」の次年1910年の日韓併合である。その直後1910年9月に書いた「九月の夜の不満」がその自覚を記録している。本拙稿の冒頭に引用した、

〔第30首〕 地<sup>ち</sup>図<sup>づ</sup>の上朝鮮<sup>てうせんこく</sup>国にくろぐろと墨<sup>すみ</sup>をぬりつゝ、秋風を聴く  
がそれである。この歌は『一握の砂』に収めなかった。その直後の歌、

〔第31首〕 誰<sup>た</sup>そ我<sup>わ</sup>にピストルにても撃<sup>う</sup>てよかし伊藤<sup>いとう</sup>の如く死<sup>し</sup>にて見<sup>み</sup>せなむ  
は『一握の砂』に収める。1年前、1909年の「百回通信」の啄木はこの第31首と同じ啄木である。では、1910年以後の啄木は第30首「朝鮮国歌」に収斂するか。その第30首と第31首「伊藤悼歌」は併存するか。あるいは、第31首「伊藤悼歌」が第30首「朝鮮国歌」の意味を規定するのか。啄木は日韓併合同じ年の大逆事件に触発され、「時代閉塞の現状」(1910年8月稿、未発表)、「所謂今度の事」(1910年秋稿、未発表)を書く。1910年の啄木は第31首を棄却し第30首に収斂する可能性を秘める。その可能性は、拙稿(内田13-23)で指摘したように、明治国家の現実直視にもとづく。

「独立記念館」の広場には、安重根の大きな記念像が立ち、遠方を眺望していた。

## 《参考文献》

- 『朝日新聞』(2009)「大逆事件残照(1~14)」夕刊5月19日~6月5日。
- 陳天華(Chen Tian-hua)(2002)『猛回顧・警世鐘』華夏出版社。
- 晴海ゆり子(2009)「陳天華の伝記」<http://www.h3.dion.ne.jp/~maxim/xingtai.htm>。
- 池田功(2006)『石川啄木ー国際性への視座ー』おうふう。
- 石川啄木(1978a)『石川啄木全集』第5巻、筑摩書房。
- 石川啄木(1978b)『石川啄木全集』第1巻、筑摩書房。
- 石川啄木(1979a)『石川啄木全集』第8巻、筑摩書房。
- 石川啄木(1979b)『石川啄木全集』第7巻、筑摩書房。
- 石川啄木(1980)『石川啄木全集』第4巻、筑摩書房。
- 石川啄木(1993)『[新編] 啄木歌集』久保田正文編、岩波文庫。
- 絲屋寿雄(1960)『大逆事件』三一書房。
- 川西正明(1996)『わが幻の国』講談社。
- 近藤典彦(2004)『《一握の砂》の研究』おうふう。
- クロボトキン(1960)『麵麩の略取』幸徳秋水訳、岩波文庫。
- 『熊本評論』(2009) : <http://www.members2.jcom.home.ne.jp/anarchism/akahatajiken>。
- 桑原武夫編(1964)『ブルジョア革命の比較研究』筑摩書房。
- 永田圭介(2004)『競雄女侠伝ー中国女性革命詩人秋瑾(チョウ・チェン)の生涯ー』編集工房ノア。
- 仁井田陸(1974①②)『中国の伝統と革命(1・2)』平凡社。
- 荻野富士夫(1984)『特高警察体制史』せきた書房。
- 島田虎次(1965)『中国革命の先駆者たち』筑摩書房。
- 清水卯之助(2002)『菅野須賀子の生涯』和泉書院。
- 秋瑾(Qiu-jin)(1971)『中国女報』「創刊の詞」『清末民国初政治評論集』平凡社。
- 秋瑾(Qiu-jin)(2004)『秋瑾選集』人民文学出版社。
- 竹内実(2008)『コオロギと革命の中国』PHP新書。
- 碓豊長(2009)「詩詞世界・秋瑾詩詞」<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/qiu4.htm>。
- 豊島直道・花井卓蔵・谷田三郎監修(1917)『日本制裁法規定』清水書店。
- 壺齋散人(2007)「秋瑾女史愛国の詩：寶刀歌」、「警告我同胞」：  
<http://www.blog.hix05.com/cgi/mt/mt-tb.cgi/113>。
- 内田弘(2008)「啄木の秋風、秋瑾の秋風」『専修大学社会科学研究所月報』No.540。(以上)